

原発連事務局FAX通信 第985号 2020年5月15日

原発問題全道連絡会 事務局発行 Fax:011-815-4545 又は011-3721-2127

核燃サイクル政策は破たんだらけなのにー

六ヶ所再処理工場 規制委が審査「合格」とは！

原子力規制委員会は5月13日の審査会合で、日本原燃の六ヶ所再処理工場の安全対策が新規規制基準に「適合」と判断し、14日から30日間、意見募集を行うとしました。

再処理工場は、政府が進める核燃料サイクル政策の柱となる重要な施設です。この再処理工場が稼働すれば、年間約800トンの使用済燃料を再処理し、約8トンのプルトニウムを分離する能力があるとされています。しかし、日本はすでに、核兵器の材料ともなるプルトニウムを内外に約46トンも保有しており、国際社会から懸念を持たれています。一方、再処理で取り出されるプルトニウムとウランの混合酸化物・MOX燃料利用の柱と位置付けられていた高速増殖原型炉“もんじゅ”は、事故続きで2016年末に廃炉が決定、政府はプルサーマルでのMOX燃料使用に躍起となっています。しかし、今稼働中のプルサーマル原発は、わずか4基（伊方3号機、高浜3、4号機、玄海3号機）で、この先再稼働してプルサーマルをやる原発がどんどん増える見通しはなく、新たに再処理する必要性はありません。

日本原燃の六ヶ所再処理工場は、2014年に新規規制基準への審査を申請しましたが、設備の点検不備などが指摘され、審査が一時中断するなど、審査に6年もかかりました。

審査では、使用済み核燃料を切断するまでの冷却期間を当初の4年から15年以上へ大幅延長、地震動の強化で基準地震動を600ガルから700ガルに変更、重要施設を設置する地盤に影響を及ぼす断層はない、稼働期間中に巨大噴火の可能性は十分小さく火砕流などの影響の可能性は十分小さい、津波は海拔55mの敷地には到達しない、臨界事故を止めるために中性子吸収剤を機器に供給するなど放射性物質の放出抑制対策も有効などと判断しています。

再処理工場を動かすのは時代錯誤、リスク高く、やめた方がよい

館野 淳さん（元中央大学教授 核燃料化学）

再処理工場は海外でも幾度も事故を起こしており、原発以上にリスクが高いと言えます。その危険は、臨界事故、高濃度の放射性物質、爆発・火災の恐れがある有機溶媒や硝酸、水素などです。爆発が起きれば多くの放射性物質が漏洩する恐れがあります。六ヶ所再処理工場は特に、2006年にアクティブ試験（使用済み核燃料を使った試験）で、事故や故障が繰り返され、完成はずるずると延期されて現在に至っています。すでに老朽化が始まっているのではないのでしょうか。無理して動かせばまた、事故を起こすのではないかと。さらに再処理工場は事故を起こさなくても、運転を始めると日常的に多くの放射性物質を放出することになります。トリチウムを含む処理水の取り扱いが問題になっていますが、再処理工場を運転すれば比べ物にならないレベルのトリチウムが放出されることになります。再処理工場を動かすというのは時代錯誤でありやめた方がいい。（「赤旗」5月14日から要旨）

合格も稼働もノー 谷崎喜治さん（核燃サイクル施設立地反対連絡会議事務局長）

核燃サイクルの柱である、夢の高速増殖炉「もんじゅ」は、1兆円をはるかに超える浪費を重ねた挙句、2016年12月、正式に廃炉となりました。この時点で核燃サイクル路線は破たんしたのです。

青森県にはすでに、仏・英から、高レベル放射廃棄物ガラス固化体が、六ヶ所貯蔵管理センターに1830本搬入されており、再処理工場を稼働させれば、更に高レベル放射性廃棄物を生み出すこととなります。きっぱりと再処理施設の合格も、稼働にも「NO！」を突きつけましょう。（「赤旗」5月15日から要旨）